

知ってる姉と知らない 弟

しょうゆらーめん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

あれ、ここもしかしてリボーンの世界!?でも私の方がツナより二つも年上じゃん!ていうか弟がなんか原作に巻き込まれてない!?

原作知識アリの姉と、原作知識ナシの弟が、リボーンキャラに関わっていく。

目次

知ってる姉	1
知らない弟	7
黒い悪魔、現る！	15
ロンシャンに注意！／プールの悲劇	25

知ってる姉

私の死因は病死だったか事故死だったか、そんなよくある平凡な死に方だったと思う。

平凡に死に、生まれ変わった私の、唯一非凡なところは前世の記憶を持って産まれたところだけ。

君は手違いで死んだんだー、なんて言い出す神様に会うこともなければ、特殊能力を持って生まれることもなかった。

今世の名前だって、『神谷 真昼』と平凡。

前世の記憶以外は、全く持って平凡なのである。

ああ、今世の私の家庭で言えば、ちよつとだけ非凡なところがあった。

母は有名デザイナー、父は有名ブランドの社長。

まあ、一般家庭と比べれば、比較的というか大分裕福な家庭だ。

嬉しいことばかりじゃない。

両親はろくに帰ってこないから、私は弟と二人で暮らしているようなものだ。

ちなみに3歳離れた弟、名前は一樹いつきといい、私と違って前世の記憶などまったく持っ

ていない。

一樹の人とは少し違うところといえば、母の『男なんだから武道やりなさい、武道！』という必死の勧めに、当時弓を扱う漫画のキャラクターにハマっていた私が『じゃあ弓道やりなさい！かつこいいし！』と全力で押し切り、渋々弓道をやっているところである。

きつかけはくだらないが、一樹は弓道で頭角を現し、全国大会常連くらいのレベルまで到達していた。

弓道勧めた私に感謝しろ。

閑話休題。

そんな非凡なようで平凡な生活をしていたある日のことだった。

「んー、前世にもあった漫画、こっちにも無いかなー」

どういうわけかこの世界は前世の並行世界なのか、同じような年代である。

だから、同じような漫画もある、と思ったのだが…

「あれ？『家庭教師ヒットマンREBORN！』だけ無い？」

ネットで検索をかけてもヒットは0件。

前世で完結していたので全部読んでいたが、一番読み返したかった漫画だったので少しシヨック。

タイトルが変わっているのでは、と一縷の望みをかけて、『沢田 綱吉』や『リボーン』なんて人名で検索してみるが、無駄だった。

最後の最後、もうやけくそで『並盛町』と検索した時。

「えーヒット!?!」

並盛町は、実在する地名として検索結果に表示された。

は？

つまり、何？

ここは家庭教師ヒットマンREBORN!の世界ってこと？

今の私は中学1年生。

うまくいけば丁度原作に関われる年齢…とはいえ、今原作のどの辺りなのかが全く把握できない。

調べてみると並盛町は県外。

そこからの私の行動は早かった。

母に連絡を取り、『私並盛に行きたい!今度の休み連れてってよ!』とワガママを言った。

しかし。

「並盛い?どこよそれ。そんな訳わかんないところより沖繩行きましよ沖繩!」

気づいたら数日後には沖繩旅行を満喫していた。

違う、違うんだよ母さん！

その行動力を沖繩じゃなく並盛に向けてくれ！

まあそれから色々頑張りと頑張り、高校は並盛高校へ通うことに。

そして私は何故か弟を巻き込み、並盛で二人暮しすることになった。

弟は並盛中学一年、私は並盛高校一年になるという訳だ。

家族で引越したわけでもなく、一時的に並盛にいただけなのに、無駄に金のある我

が母は姉弟に一軒家を与えた。

金銭感覚トチ狂ってるんじゃないかと本気で疑い始めた。

さーて果たして原作はどうなっているのか。

そしてごめんよ、弟。思い切り私のワガママに巻き込んで。

話は飛んで、並盛。

そう、私は念願の並盛に来たのである！

あ、一つ言っておくと、私は原作キャラと関わる気はあまり無い。

一目見てみたいとは思いますが、原作に変に介入したらどうなってしまうのか予想できないからだ。

まあ今が原作外の可能性が高いんだけど。

しかし、高校入学式の時に読み上げられた名前をずっと聞いていたが、原作キャラの名前はなかった。

まだ中学生なのか、それとももう私よりも皆年上なのか。

「ねえ、一樹。中学に有名な人っている？」

それを明確にするため、私は中学入りたての一樹に聞いてみた。

「有名な人？んー、一番は風紀委員長雲雀恭弥。あとは、二年の銀髪の不良……えーっと、確か獄寺 隼人だっけ？それと、その人とよくいるダメツナってあだ名の人。本名忘れた」

原作真っ只中じゃないか。

「沢田、綱吉……」

「あ、そうそうその人。え、姉ちゃん何で知ってるの」
「…勘」

最悪な誤魔化し方である。

案の定何言ってるんだコイツみたいな視線を送られた。

「黒い悪魔のような赤ちゃんとは絶対関わんなよ」

「は？何言ってるの」

私の忠告は、本気にされることなく終わった。

知らない弟

「ちやおっす」

黒いスーツを着た赤ん坊が、俺の行く手を阻む。

『黒い悪魔のような赤ちゃんとは関わんなよ』

姉ちゃんの言葉が、ふと頭をよぎる。

いやいやいや、まさか。

「よお、赤ん坊。保護者はどうした」

「俺は殺し屋だぞ。なめんな」

そう言つて赤ん坊が取り出したのは、拳銃。

どう見てもオモチャじゃない。

ああ、ごめん姉ちゃん。

姉ちゃんの言つてゐることは正しかったよ。

「んで、その殺し屋サマがおれに何の用なんだ？」

内心撃たれやしないかとびくびくしつつ俺は物騒な赤ん坊に問いかける。

「お前、ツナのアミリーに入れ」

「は？ファミリー？っていうかつなつて…沢田先輩のことか？」

ファミリー、家族。

いや、この場合コイツが殺し屋だと仮定するとファミリーってのはマフィアか。

「そうだぞ」

ん？何が “そう” なんだ？

「だから、マフィアだつてことだ」

あれ、心の中読まれてる？

「俺は読心術を使えるんだ」

「チートかよ…」

思わず頭を抱える。

いや、だつて仕方ないだろ。

…ん？待てよ、俺はマフィアに勧誘されてんのか？

「そうだぞ。ちなみに拒否権はねえ」

「強制かよ…いやいや、何で俺なんだよ。他にも誰かいるだろ…」

「お前、弓道やつてるそうだな。なかなかの腕前みてーじゃねえか」

そうきたか。

弓道勧めた姉を全力で恨みたい。

「俺たちのファミリーには遠距離攻撃ができる奴がいねーからな。ちょうどいいんだ」
「あ、リボーン！お前何してんだよ！」

沢田先輩が息を切らしながら割って入ってきた。

この赤ん坊、リボーンっていうのか。

そういう名前聞いてなかったな。

「ツナ、こいつも今日からお前のファミリーだ。よかったな」

「よくないけど!?というか誰!？」

全く了承していないんだが、リボーンの中ではもう俺はファミリーの一員らしい。

姉ちゃんに心配かけたくないから、マフィアなんてやりたくないんだけど。

「どうも、並中一年の神谷 一樹です。沢田綱吉先輩、ですか？」

「え!?あ、うん。お、オレは二年の沢田綱吉…ツナでいいよ」

沢田先輩、お言葉に甘えてツナ先輩は、何が何だか、といった様子で自己紹介してくる。

「ちなみにマフィアになる、という話に了承した覚えはありません」

もう帰っていいかな。

あ、ダメだ今から学校行くところだった。

「り、リボーン！勝手に人を巻き込むなって！」

「俺に指図するな」

さて、俺は面倒なことになる前に退散しよう。

ツナ先輩とリボーンの二人に背を向け、俺は学校に向かっていった。

日が傾き、街が茜色に染まった頃。

どうしてこうなった！

「コイツもボンゴレに、ですか!?!」

銀髪不良で有名な獄寺先輩が、敬語でリボーンに話しかけている。

まあ何とも奇妙な光景だ。

「ハハッ、いーじやねーか。お前もマフィアごっこやるのか？名前は何？」

爽やかに笑いかけてくるのは、野球部エースの山本先輩。

この人マフィア「ごっこ」だと思ってるのか。

あのどう見ても普通じゃない赤ん坊見てもごっこだと思えるってすげー。

「俺は神谷 一樹です」

「お前があのか神谷か」

あのか何ですか獄寺先輩。

俺そんなに有名なの？

「あ、あの噂の弓道部エース！」

ツナ先輩が声を上げたので、何故有名なのか謎が解けた。
弓道関連か。なら納得もいく。

俺は小さい時から弓道をやっていて、それなりに全国大会で連覇したりもしている。

この並盛中の弓道部、部員も少なく目立った功績も無かったので、廃部寸前だった。

しかし俺が入り、そこで並中弓道部と活躍できればそんな危機も免れる、と先輩方が
たいそう御喜びになってなついたので。

大方その先輩がいろんなところで俺の話をしているのだろう。

「でも、神谷くん、ま、マフィアに入る気無いだよね？」

頷いてくれ、と目線で訴えてくるツナ先輩。

「まあ、姉ちゃんに心配かけたく無いですし」

「お姉さんがいるのか！ 獄寺と一緒だな」

話を逸らさないでください山本先輩。

「まあ、はい。今姉ちゃんと実家離れて二人暮らししてて、主に家事は姉ちゃんがやってるんですけど、姉ちゃんにすつごく世話になってるから、これ以上メーワクかけたくないっていうか」

「なら姉もマフィアに入ればいーじゃねーか」

「余計迷惑かけてないか!?!」

リボーンのとんでもない提案に思わずツッコんだ。

ろくに家になかった親の代わりに、姉ちゃんは何でもやってた。

料理、洗濯、掃除、買い物とか、年末の大掃除だって姉ちゃんが一人でやってた。

俺は何にも出来なくて、姉ちゃんに世話になってばかりで。

だからかな。

姉ちゃんの言うことに反論したことはあまりない。

俺にとつては姉ちゃんに感謝することしかない。

口に出しては言わないが、これでも姉ちゃんを大事に思ってるし、とてもありがたいと思ってる。

だから、これ以上姉ちゃんに迷惑かけたくない。

姉ちゃんに迷惑ばっかりかけてるから。

「そうと決まればお前の姉ちゃんに会いに行くか」

何が、いつ、どう決まったと言うのかこの悪魔の赤ん坊は。

「何にも決まってるよね!？」

ああツナ先輩、常識人はあなただけだったのか。

「うるせえ」

しかしそんな常識人も、リボーンのとろっぴキックに一発KO。

「いーから行くぞ、ツナ。獄寺、山本、お前らも来い」

「リボーンさんが言うなら…」

「面白そうなのな!」

面白くないですよ。

先輩二人は来る気満々。

マフィアのことに触れさせなければ良い、のか？

ああごめんよ姉ちゃん。

何とか姉ちゃんをこの悪魔の勧誘から守ってやるから。

そしてリボーンの独断で、俺たちは俺の家に行くことになったのである。

おい、リボーン。何でお前先端歩いてんだ。

俺の家知ってるのか。

「どんな人なんだ？」

山本先輩が気さくに話しかけてくれる。

「家事万能で、勉強する暇なんて無さそうなのに成績はすごく良いです。あ、でも運動音痴だから体育だけすこぶる悪かったか。…そんなもって、結構変わり者…だと思いません。基本的には優しくして良い姉ですよ」

俺は姉の姿を思い浮かべる。

あ、そういやこの時間って姉ちゃん買い物行ってるんじゃないか…

黒い悪魔、現る！

学校からスーパーを経由して家に帰ると、いつぱい靴が並んでいた。

一樹のお友達かな？

リビングの方から少し話し声がする。

でもリビング通らないとキツチンに行けないんだよな。

早く冷蔵庫に入れないと、魚が腐るんだけど。

はあ、とため息をつき、今度からはちゃんと連絡しろと一樹に言おうと考えながら、私はリビングのドアを開けた。

「あ、おかえり姉ちゃん」

「お邪魔してます…」

パタン、と扉を閉める。

幻覚でも見ているのだろうか。

今リボーンの主要キャラが我が家にいた気がしたんだけど。

「何で閉めんだよ」

弟に開けられた。

ああ、幻覚じゃなかった。

いるよ、いる。

そこに主要キャラがいるよ。

どうしてだ弟よ。

お前確かこの人たちと学年違うだろ。

「えー、はじめまして。一樹の姉の、真昼と言います」

仕方がないのでとりあえず自己紹介。

黒い悪魔、もといリボーンは…うわ、いた。

まさか弟よ、原作に巻き込まれてないだろうな。

「は、はじめまして！沢田綱吉です」

「俺は山本武一！んで、こっちが獄寺隼人な」

山本くんは獄寺くんが挨拶しないことを見越してか、代わりに自己紹介してくる。

ごめんなさい知ってます。

「俺はリボーン。マフィ」

一樹が全力で口を塞ぐ。

超一流のヒットマンにそんなことして大丈夫か。

あー今の流れからすると、マフィアって言おうとしたのを阻止したっばいから…もし

や一樹はマフィアのことを既に知ってるのか。

しつかり巻き込まれちゃってるなー。

頭を抱えたい。

「あー、そうだ姉ちゃん！お茶、お茶出して！」

わざとらしい。

大方私を関わらせたく無いから、ひとまずこの場から私を追い出そうとしているんだろ。

良い弟すぎて涙が出る。

「はいはい」

一樹が出ていけと目で訴えてくるので、私は仕方なくキッチンに移動する。

冷蔵庫を開けて食材を放り込んでから、お湯を沸かしはじめた。

「お茶でいい？コーヒーも出せるけど」

キッチンから顔を出してそう聞くと、一樹がすごい目つきでこちらを睨んできた。
怖い怖い。

「お茶ーでー！いいからー！」

いや、あんたじゃなくてお客さんに聞いてるんだけど。

お茶でいいのかな、ほんとに。

リボーンはエスプレッソが好きなんだっけ。

でも赤ん坊にエスプレッソなんて出したら怪しまれるかな。

普通にお茶にしておこう。

人数分のお茶をお盆に乗せ、キッチンから出る。

もう話は済んだのか、一樹は特に何も言うことはなかった。

「どーぞ」

一人一人の前にお茶を置いていくと、獄寺くん以外はお礼を言ってくれた。

「ごめんね、ジュースとかお菓子もあれば良かったんだけど、一樹も私もあまり食べないから」

主に私が財布を握っているせいである。

無駄に金があるとはいえ、優雅にアフタヌーンティーを楽しむような無駄遣いはできない。

おい、弟、聞こえてるぞ。

今お前、姉ちゃんがケチなただけだろ、って言ったな。

「おやついらなからって言うってお小遣い前借りしてゲーム買ったの誰だったかなー

…」

「ごめんなさい」

よろしい。

沢田くんは苦笑いでその様子を見ていた。

ごめんね、こんな家庭で。

「じゃあ私は自分の部屋にいるから」

正直逃げたい。

主に黒服のちびっこヒットマンから。

さつきからすぐくニヤニヤしながらこつち見てるんだけど。

「まして」

うわあ喋ったよこの赤ん坊。

聞こえてないふり：は、通じないだろうなあ。

とりあえず何か答えようとした時、私はいきなり扉の方を向かされた。

そのまま両手で背中を押され、私は部屋を出ていくように歩く。

弟だ。

「姉ちゃんは自分の部屋にいていいから!!」

一樹はすごい力で私をぐいぐいと押していく。

私はそれに逆らえず、気づけば廊下に閉め出されていた。

強引だったけど、関わりたくない私にとっては正直ありがたい。

弟は犠牲になるけど。

にしても、どうしてあの面子が弟に関わってるんだ…なんて思いながら自室の扉を開くと。

「ちやおっス」

閉めていいかな。

ボルサリーノを被った赤ん坊が目の前に見える。

幻覚…じゃないよなあ。喋ったし。

「えーと、リポーンくん…だよね? どうしてここに居るのかな?」

超一流のヒットマンは瞬間移動もできるのか。

「おまえにちよつと聞きたいことがあつてな」

嫌な予感しかしい。

だが今更リビングの方に戻ることもできないため、逃げ道は無い。

落ち着いて対処するんだ、私。

相手は子供だと思って接しなければ…

「どうしてオレのことを知ってたんだ?」

…ん?

……………あああああ!!!

そういやリボーンって読心術が使えるんだ!!
ってことは、私の思ってたこと全部筒抜け!?

え、どうしたらいいの!?

「どうして私が、リボーンくんを知ってると思ったの?」

頭の中では大混乱が起こっているが、それを悟られぬように…（意味ないかもしれないけど）

「お前の弟が、『黒い悪魔のような赤ちゃんとは関わんなよ』って姉が言ってたって聞いたんだもん」

「……それ、一樹が言ってたの?」

「いや、思ってた、が正しいな」

過去の私を全力でぶん殴りたい。

私が注意したことは3分で忘れる弟が、どうしてそんなことは覚えてたんだ!

「オレは読心術が使えるんだゾ。…まあ、おまえの心は読みにくいかな」

リボーンが思わぬことを口にする。

つまり、あれか?

私が今まで慌てていた意味は無かったわけか?

「どうして読みにくいのか?」

「簡単に言えば相性最悪ってことだな。こんなこと、滅多にねーゾ」

嬉しいような嬉しくないような。

読まれないのは嬉しいけど、この家庭教師ヒットマンと相性が最悪ってもはや死亡フラグでは？

「で、どうしてなんだ？」

「…占い、みたいな」

おいおい、みたいな、って何だよ私。

そこはいつそ言い切れよ。

「ま、そういうことにしといてやる」

リボーンはそう言ってボルサリーノのつばをくいつと下げ、笑った。

それはそれで怖い。

「おい、リボーンっ！」

私の後ろから、そんな叫び声が聞こえた。

声は一人だったが、足音は二人分。

一樹と……沢田くんかな？

「うるせえ」

「ぶっ」

予想通り、その二人だった。

沢田くんはリボーンの華麗なドロップキックを受けて廊下に倒れる。

今叫んでたのって一樹だったよね…？

「姉ちゃん！リボーンに何か変なこと言われなかったか!?」

「変なこと？」

十中八九マフィアのことだろうが、私は全力でとぼけた。

「いや、何も無いならいいんだ…」

一樹は安心したように微笑んだ。

リボーンはその一樹ごしに、にやりと笑う。

ちよつと嫌な予感がしたが、それ以上私に何も言うことなく、リボーンは去っていった。

騒ぐ沢田くんと一緒に。

「なんか隠してそーだな」

リボンがそんなことを言っていたなんて、私は全く知らない。

ロンシャンに注意！／プールの悲劇

／1

「一樹、買い物行かない？」

「どうせ荷物持ちだろう？……いいけどさ」

うんうん、なんだかんだ言いながら従ってくれるんだよなあ、一樹は。

我が弟ながら良い子である。

「買いだめするつもりだから、よろしくね」

あからさまに嫌そうな顔をしたのは見て見ぬ振りをしよう。

私は寛大なのだ。

早速行こう、と玄関先に出ると、ふいに一樹のケータイが鳴った。

一樹は不思議そうな顔をしながら電話に出る。

「あー、もしもし……ああ、おまえか。…ボウリング？誰と？……いや、ロンシャンって

誰だよ……ってというか俺はこれから用事あるから。悪いな。……じゃ」

ピツ、と電話を切る弟。

これは、もしや原作にもあったあの地獄のようなボウリングの話だろうか。

いや、確実にそうだ。

「ロンシャン」と思い切り言っていた。

この話は内藤ロンシャンと化け物みたいな女3人（ひとりはりボーンの変装であるリボ子）とツナでボウリング（合コンもどき）をする話である。

気に入られたら最後、生きたままストラップにされる。

危なかった：私が買物に誘っていなければ一樹がストラップにされるところだったのか：

「早く行こう、姉ちゃん」

目の前に立つ一樹は、自分がそんな危機にあったことはちつとも知らない。

／2

とうとう並盛中学でプール授業が始まった。

俺は別に泳げないわけではないが、得意というわけでもない。

ただ：ツナ先輩が泳げないらしい。

15メートル泳げないと女子に混ざって練習させられるのだとか。

それを回避しようと、ツナ先輩は山本先輩と特訓を始めるらしいのだが：

「これ、俺がいる必要ありますか？」

何故か俺まで巻き添えを食らっていた。

「まーまー、皆でやる方が楽しいだろ?」

山本先輩はいつもの爽やかな笑みで俺にそう言った。

「んじや、ツナ。とりあえず泳いでみるよ。ここなら浅いから」

「う、うん。よーし…」

まあでも、ツナ先輩も全くできないわけじゃないだろう。

…と、考えていたのは数分前のこと。

あ、この人ダメだ、と思うのは早かった。

溺れているのと大差ないような動きでなんとかメートルを泳ぐツナ先輩。

正直苦笑いしかでてこない。

しかも泳いだから盛大にむせている。

「いいかツナ!ぐつともぐつて…」

そんな先輩に、山本先輩が熱心に指導する…のだが、いかんせん説明が悪い。

かろうじてジェスチャーはついてはいるが、説明が訳のわからない擬音語だらけである。

「そーすりやすいーっといくから!」

それでわかるのは感覚で生きてる人間だけだろう。

案の定ツナ先輩は、愕然としている。

「助けてー!おぼれてるー!」

と、そんな時、女の子の助けを求め声が出た。

見ると、黒髪でポニーテールの女の子が足がつかずのプールで溺れている(ように見える)。

「ハル!」

どうやらツナ先輩の知り合いらしい。

予想はついていた。

「足つくだろ?」

ツナ先輩にそう言われると、女の子はやはり溺れてなどいなかったようで、簡単に立っていた。

その後も女の子は謎理論を展開し、周りの子供からヘンタイよばわりされていた。

俺は知り合いだと思われなくなかったので少し遠くに立っている。

だがまあ、ツナ先輩があまりにもかわいそうになってきたので流石に近づいて話しかけることにした。

「えーと、ツナ先輩の知り合いですか?」

「はひ?ハルはツナさんの恋人で、三浦ハルといいます!」

「違うからーっ!」

ツナ先輩もやるじゃないか、可愛い女の子に慕われるなんて。

「俺はツナ先輩の後輩で、神谷一樹といいます。よろしくお願いします、ハル先輩」
「年下だったんですね!ハル、同い年かと思ってました…」

姉と二人暮らしのせいかしっかりしているとはよく言われる。

「ハル先輩は、ツナ先輩を指導しに来たんですよね?」

「そうです!やっぱりまごころ指導が一番ですよね!」

話がまいち噛み合わないんだが。

そうと決まれば、とハル先輩は早速ツナ先輩の指導に入っていた。

具体的に言うとうと、ツナ先輩の手を引いて呼吸やバタ足の練習をしていた。

…あれは恥ずかしい。

練習としては一番いい方法だと思うのだが、子供に笑われている。

ハル先輩もまともじゃなかったか、と思っていれば聞き覚えのある声が外の方からした。

「10代目!」

ガシャガシャと音を立ててフェンスを登って来たのは、獄寺先輩。

「ご病気ですかっ!」

「いいながら終いには服のままプールに飛び込んで来た。いいのか。ダメだろ。」

「泳げない体になってしまったなんて!!」

獄寺先輩はツナ先輩の肩を掴んで必死の形相で叫ぶ。

誤解を解き、そうしてまた、新たな指導者が増えた。

3人いればひとりくらいまともな指導者がいてもよさそうなのに、まったくダメだった。

理論指導はちよつと難しいんじゃないだろうか。

「はあ、しょうがない」

俺はため息をついてツナ先輩に近づいた。

「いいですか、先輩。クロールにはコツがあります」

「え?」

「おい!俺の指導の邪魔をするな!」

獄寺先輩が何か言っているが無視だ無視。

「ハル先輩が指導したように手を引いてもらわなくても、呼吸やバタ足の練習くらいなら壁に掴まればできます。その方が先輩もいいでしょう」

ようやくまともな指導が、とツナ先輩が表情を輝かせた。

といつても、俺も大して泳ぎが得意というわけではないんだが。

「クロールは腕で進みますから、腕は前から後ろに大きく回してください。肩を開くようにすると、大きく回せますよ。あ、あと先輩手え開いてますけど、指揃えてやった方が水を掻きやすいですよ」

軽く腕を動かしながら説明する。

「あと、息継ぎですが…先輩、水中で息止めてませんか？」

「えーつと、止めてる…かも」

「止めちゃダメです。水中では息を吐くようにしてください。そうすれば息継ぎで十分に息を吸えるようになりますから。…じゃあ、一度今言ったことを意識して泳いでみてくれませんか？」

よし、と気合をいれ、ツナ先輩は水中へ。

さつき言つたばかりだから身につけていないのは無理もないが、最初よりはフォームがマシになっていた。

「ふはっー」

「お、10メートル！」

山本先輩が嬉しそうに声を上げる。

「え!?!」

ツナ先輩は驚いたようにその記録を聞いた。

あと5メートル。これ以上俺から教えることはない。

「じゃあ俺帰っていいですか」

「え、あ、うん！ありがとう神谷くん！」

意外にもすんなりと帰してもらえた。

俺は大体予想がついていた。

あと一息、と3人が独自の指導を展開することを。

それに巻き込まれるのは嫌だったので、早々に帰宅する。

ちなみに後日聞いた話では、クロールではなく平泳ぎをさせられたらしい。

…つまり俺の指導も無意味だったってわけだ。

悲しくなんてない。